

2020年度 第1回 豊岡市総合教育会議（定例会）議事録

○ 開会及び閉会の日時及び場所

2020年5月18日（月）

場 所 豊岡市役所 7階 第3委員会室

所在地 豊岡市中央町2-4

開会時間 午前9時30分

閉会時間 午前10時30分

○ 出席者及び欠席者の氏名

出席者 豊岡市長 中貝 宗治

豊岡市副市長 森田 敏幸

豊岡市教育委員会

教育長 嶋 公治

委員 佐伯 和重

委員 向井 美紀

委員 飯田 正巳

委員 成田 壽郎

○ 事務局等関係者の氏名

事務局 教育次長 堂垣 真弓

教育総務課長 永井 義久

こども教育課長 飯塚 智士

こども教育課参事兼教育研修センター所長 内海 忠裕

こども育成課長 木下 直樹

教育総務課参事兼課長補佐 木之瀬 晋弥

教育総務課総務係長 竹内 有子

教育総務課総務係主査 藤田 祐

政策調整部長 塚本 繁樹

政策調整課長 井上 靖彦

○ 日程

1 開 会

2 協議事項

(1) 大綱の策定について

3 その他

4 閉 会

○ 会議の概要

【日程1 開会】

(堂垣教育次長)

定刻となりましたので、ただ今から2020年度第1回豊岡市総合教育会議を開会します。

なお、会議で活発な意見が協議できますよう、市長に代わりまして私が司会進行をさせていただきます。よろしくお祈いします。

本日は、新型コロナウイルス感染防止のため、会議を短縮することとし、市長及び教育長の挨拶は割愛いたします。

【日程2 協議事項】

(堂垣教育次長)

それでは、協議事項に入ります。

内容について補足説明をするために担当部局の職員が出席しておりますので、ご了承ください。

本日は、「大綱の策定について」ご協議をお願いいたします。

資料No. 1-1をご覧ください。

地方公共団体の長は、教育基本法第17条第1項に規定する基本的な方針を参酌し、その地域の実情に応じ、当該地方公共団体の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱を定めるものとされております。

第2項におきましては、地方公共団体の長が大綱を定め、またはこれを変更しようとするときは、あらかじめ、次条第1項の総合教育会議において協議するものとされています。これまでの大綱につきましては、2015年度第1回の総合教育会議において、第3次とよおか教育プランを大綱に位置付ける旨を決定しております。

この度、教育委員会では、今年の2月に第4次とよおか教育プランを策定しました。つきましては、この第4次プランを新しい大綱に位置付けることにつきまして、ご協議いただきたいと考えております。

第4次プランの策定にあたりましては、昨年11月に開催しました第2回総合教育会議におきまして、素案の内容を協議いただいております。その協議結果を基に素案を変更しておりますので、前回の総合教育会議の素案から変更した部分につきまして、担当からご説明をさせていただきます。

(藤田教育総務課総務係主査)

前回、2019年11月の総合教育会議の素案からの変更点について、説明させていただきます。資料No.1-2と第4次プランの冊子をご覧ください。11月の総合教育会議のときの素案では、基本理念に、主題として「ふるさと豊岡を愛し夢の実現に向け挑戦する子どもの育成」、副題として「夢実現力(やり抜く力・自制心・協働性)を子どもたちに」と定めておりましたが、総合教育会議の際に、市長から「やり抜く力・自制心・協働性を夢実現力と言ってよいのか。論理的に違うような気がする。議論をしてほしい」という意見がありましたので、教育委員会の内部で再度協議をし、とよおか教育プランの策定委員会でも諮らせていただきまして、最終的に基本理念の副題を変えさせていただきました。

変更後の副題を、「非認知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を子どもたちに」とさせていた
だきました。この非認知能力を副題とした理由につきましては、冊子の12ページに記載して
おります。第3次プランで掲げた夢実現力（なりたい自分になるためにがんばりぬく力）、この考
え方を継承、発展させるものとして、非認知能力に焦点化することにしました。その非認
知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を伸ばすことが基本理念実践の方向である
と考えまして、副題としております。

総合教育会議からの主な変更点につきましては以上ですけれども、この他に冊子
の中で文章表現を変更した点や用語説明を加えた点があります。それから、新たに
ページを加えた部分がありまして、冊子の表紙の裏面になりますが、「はじめに」と
いう前文をつけ加えさせていただきました。

それから、18ページに、とよおか教育プラン策定委員会の委員名簿と策定の経過
の資料を付けさせていただきました。それから、19ページに策定委員会の設置要綱
を付け加えさせていただきます。昨年の総合教育会議のときから変更した点につ
きましては以上になります。

（堂垣教育次長）

説明は終わりました。ご意見等ございましたら、よろしくお願ひします。

（中貝市長）

明確になっていいと思いますね。いくつか気になったことを言いたいのですが、共
感力というのは英語で言うと、シンパシーではなくエンパシーであるということ。
エンパシーというのは、前にも言いましたようにブレイディみかさんの本によると、
イギリスでは「自分で誰かの靴を履いてみる」というふうに使われています。そ
れは対話のコミュニケーションの基本なので、自分のことを言いつばなしだとか、
いかに伝えるかだけではなくて、相手をどう受け入れるかということが重要な
ので、それがないとそもそも対話のコミュニケーションは始まらない。これは
協働性に関わることなのです。主体性と協働性に関わることです。この非認知能
力は良いことなんですけれども、ものの見方を知って話をしないといけません。

京大の山極総長はゴリラの専門家ですが、ああいう類人猿をなぜ研究するのかとい
うと、昔あるところから人間と先祖が分かれたわけですね。先祖が共通なので、
類人猿のいろいろなことを研究することによって、人間が分かるという言い方を
しています。結局、人間はなぜここまで社会というものを発展させることが
できたかということ、共感力だと言います。共感力というのは相手がどう思
っているのだろうかということを考える。それがあからチームができてくる。
それがなければ、たぶん群れない。例えば協働して何かをしようとするとき
に、「あそこにいるやつはどういうふう考えているか」という思いを寄せるから、
物理的に離れていても時間的に離れていても、チームとしての一体感をもつ。
それを得たのは人間だけだと。それは脳の発達による技です。つまり、自分
がということだけではなく、相手がどう考えるんだと、そのことにシンパ
シーが持てるかどうかは関係ない。「それはそうだね、お前の言うとおりにだ」と
肩をたたくようなシンパシーは持たないかもしれないけれども、少なくとも「相
手は何を考えているのだろうか」ということに思いを寄せることはできる。そ
れがチームを作る。あるいは、社会を作ることになり、国家のような強大な
ものを作り上げていく、そういうことだと思います。それは同時に、対話の基
礎でもあり、対話というコミュニケーションの一形態は1対1ですよ。それは、
相手に

に対する敬意みたいなものが基本にあって、ここにある協働性だとか、やり抜く力、自制心だとかというものの解釈というか、理解として、そういう点を持つといえるでしょうね。

さっきも教育長と佐伯委員とも話していたのですけれども、本当に今回は何が正しいか分からない。子どもの感染が心配だから一歩たりとも家から出すなというのも分かる。正直なところ、どれくらいひどいか分からないわけですから。他方で、このまま子どもたちを放っておいていいのかというのがあるって、みんなで議論をした。みんなで意見を出し合った。みんなの意見に耳を傾けたうえで、どれが確からしいのかということを探っていくような作業をしてきて今日がある。と考えると、共感力、あるいは、対話するということが、大切なものになってきますね。これから変化が今よりさらに激しくなってきたら、昨日正しかったことがもう今日わからないということが頻りに起きてくるので、結局、こういうときには基本的な事柄が大切になってくる。それは、相手の話を聞く態度であるとか、協働して何かを作り上げるという態度であるとか、そういうことなのだろうと思います。その辺の基礎があると、変化をしてきたとしても、子どもたちはその中で耐えていけるような気がするのです。計画書はいいと思いますけれども、これから実際にこれを動かしていくときに、今回のコロナ騒動の経験というのは、すごく意味があると思います。

それから、ハラリさんという歴史学者で哲学者ですが、『サピエンス全史』という世界的な超大ベストセラーを数年前に書いた人で、その後、『21 Lessons』という本を出して、最近盛んに発言しているのですけれども、とても興味深いことを言っています。1つは、独裁制にいくのか、民主主義が息を吹き返すのか。中国は徹底した管理をやっているんで、個人の行動は全部把握できるためあんなことができちゃう。うまくいったので、「ああ、やっぱりそうだよね。独裁制だよね。僕たちには何が正しいか分からないから、誰か優れたやつがいたら、強靱なリーダーが現れてきて率いてくれたら、それでいいじゃん」というふうにどんどんいく。日本の国会を見てみると、いらいらしてしまう。そうすると、中国みたいな感じがいいよとか、トランプさんもそうですね。いいかどうか分からないけれども、ああいうような政治体制に一気に突き進んでいく。それができるような技術というものをみんな持ち始めてしまった。

今までは、例えば僕が頭の中で何を考えているか分からないわけですが、これから先、マイクロチップを埋め込んで、僕の血圧がどう変わったとか、脈拍がどう変わったということが全部わかるようになって、今まで人間がチェックできなかったこともAIがやっちゃうので、中具は顔で笑っているけど、えらい脈が上がっている。血圧が上がっている。こいつはどうも俺に反対しているなというのが見えてしまう。なので、そういう方向に一気にいく可能性はある。他方でサイエンスを信じて、そして、みんなで、分からないわけですから力を合わせていく。今回コロナウイルスというのは、かなり早くウイルスが確認されている。世界的な協力があるからこそ、コロナウイルスというのはこういうウイルスだとわかったんで、日本とアメリカとドイツとで協力して、アビガンをこうしましょうとか、国境は閉鎖しているけれども、情報交換し、知恵を交換することによって、協働して抑え込んでいく、そういうふうなこともあり得る。いったいどっちにいくのかという岐路に立たされているというのです。どっちに行きたいのか。というようなことを思うと、ここにサラッと書かれたことは、実はすごく意味があるということが、今回のコロナウイルス騒動で分かってきたのではないかと思います。

そういう意味で、さらにハラリさんが言っているのは、今アフリカだとかの開発途上国が苦しんでいるのを他人事としたりしていない。このウイルスがたった1個でも突然変異を起こして強力なウイルスが生まれたら、世界中がまたそれで苦しむ。なので、日本だけ、アメリカだけ関

係ないではすまない。世界中の国で抑え込まないと、どこかの国でたった1個のウイルスが突然変異を起こしたら、どんなに国境を閉鎖しても、人の移動というのは、完全に止めることはできないので、そうすると、世界中が困ってしまう。なので、アメリカのようなリーダーではいけないということを言っています。つまり、単なる理念の問題ではなくて、自分たちの社会のありようを考えたときに、組織のありようを考えたときに、力を持ち寄ることが必要だというようなことです。

『13歳からのアート思考』という本を最近読んだのですけれども、美術教師が書いた本です。美術というものにどういうふうに接したらよいかというようなことが書いてあります。その冒頭の方にこんなことが書いてあります。モネの睡蓮という絵が大原美術館にあります。それをある時、4歳の男の子がその絵を見て、「あ、カエルがいる」と言った。学芸員はもちろん、モネの絵にはカエルがないのはよく知っているし、モネのどの睡蓮の絵にもカエルは1匹もいないことは知っている。「どうして？」と聞くと、「今、水の中に潜っている」と。素晴らしいですね。その子の世界の中で、ああいう池を見るとカエルがいるのです。どうもあの辺のハスの下のあたりにいそうだと。要するに、そういう自分の目で見るということをちゃんと育てていかないといけないという話で、すごく感動しました。テストだったら間違いなんでしょうけれども。でも、そういう子を育てていければいいですね。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。ご意見ございませんでしょうか。先ほど市長からありましたコロナの関係につきましては、またこの後に協議をさせていただきたいと思えます。プランにつきまして、他にご意見はありませんでしょうか。

(嶋教育長)

基本理念の非認知能力「やり抜く力・自制心・協働性」という、これが代表的なものとしてやりますよというか、分かりやすくするために提示した象徴的な言葉なのですけれども、ずっとやっていくと、ひょっとしたらこれの基礎になるものがあるのではないかということが分かってきて、そのことが自己効力感という考え方で、今非認知能力のワークショップをしています。だから、やり抜く力や自制心や協働性を育むためには、自分にはよいところがあると思うとか、何かをやりきって嬉しかったことがあるとか、自分は頑張り屋だとか、楽しいものを自分で見つけることが得意だとか、こんなことが得意だとか、何かそんなことが下支えとなって、実はこの非認知能力はスパイラルに蓄積されていく。だから、自己効力感のカルテで、「先生はいいところを見つけてくれる」というのは、やはり意味があるのだということを私たちは学べたし、そのことをやっていきたいし、どこでどういうタイミングで、どんな褒め方を子どもにするのかということをもますます磨いていくことがすべての領域や教科で大切だと思います。豊岡市では、それを学校だけではなくて、家庭や地域でも同じようなことをして、ますますこれが市全体の力となって、市民にとってもすごく効力のある、ものすごい言い方をしたら、この教育をやっていけば豊岡市がもっとよくなっていくのだ、そんな勢いで5年間やっていけたらなというふうに思います。

(中貝市長)

今言った『13歳からのアート思考』で、その人はこういうやり方をするのです。美術館の絵を

見せると、みんなだいたいすぐ下の解説書を読んで分かったような気になるんですけども、絵で感じることをずっと書かせるのです。例えば、マティスの絵を1枚見せて、緑の鼻の妻の肖像画みたいな絵です。とにかくみんなに書かせるのです。鼻の色がおかしいだとか、背景の色が赤と黄色と青だけれども不自然だとか、右のほうは肌が荒れていて、左のほうはツルツルしているだとか、そういうことをずっと書かせる訓練をしていくと、まさにアウトプット型と言われていましたが、そういうことを通じて自分なりの見方というものを訓練して行って、それが主体性だとかにつながっていく。成績のいい子、悪い子もいるけれども、自尊心につながっていくのかなと。まったく評価のしようはないんですけども。

ちなみに、成田委員は今も絵を描いていらっしゃるんですけども、その先生が言うには、小学校から中学校にあがるときに、だいたい教科が嫌いになるそうです。小学校のときに算数が好きだったけど、中学校になると嫌いになるとか。いちばん多いのが美術だそうです。つまり、小学校から中学校のときに、たくさんの子が美術を嫌いになる。これはなぜかというところからスタートしたそうです。美術史みたいなことを覚え込まされたとかそういうことだろうと。だけど、ピカソの絵を見て「変だ」。「どこが変なのだろう」と言って、ずっと書かせていくことを通じて、ものの見方だとか、いろいろな見方があるといいとか、そういうことが子どもたちに伝わっていくと、美術ってなかなか有望だという気がしますね。

(成田委員)

嬉しい話だなと思って、聞かせていただきました。私は美術が好きで、退職後はアーティストを目指して活動しております。若い頃から好きで関わってきましたが、やはり1つは、美術を一所懸命やっていると、変わり者だという見方をたくさん受けてきたように思います。高校時代からそういう目で見られてきたなと感じます。それはそれでいいのですけれども、もう1つは、学校に勤めて、教頭という仕事をしたときに、図工の授業を受け持ったことがあります。子どもたちは、普通の授業ではたぶん見せないような、嬉々とした、活き活きとした姿を図工の時間で見せてくれることがものすごくたくさんありました。私はその時の子どもから発するエネルギーをいただいて、勉強したなというように思います。それが何なのかは分かりませんが、たぶん子どもが持つ現象的な非認知能力というか、そういうところが発揮されている場がそこにあったのではないかと。私は、その時は単にここを気づきの場に使ってもらったらいという感覚で、子どもたちに関わっていました。ですから、上手な絵を描かせることよりも、子どもの心を発散させるということを第一義的に関わっていたようなことを思い出しました。今の市長の言葉はそれが少し肯定的に捉えられた感じがあるなというふうに私には伝わってきて、少し嬉しくなりました。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。他にご意見はございませんでしょうか。

(飯田委員)

今の市長や成田委員のお話で思い出しましたが、保育園訪問のときに、2歳か3歳の子がお絵かきをしていました。ぜんぜん僕たちには何を描いているのかわからない。でも、「これ、何なの？」と聞いたら、その子はちゃんと「これは〇〇だよ」と答えるのです。「えっ、すごいな、すごいな」

と言ったら、もう1つ描くのです。それが今おっしゃったように非認知能力の、その子を伸ばす可能性ではないかな、無限の力になるんだなと思ったことを今ふと思い出しました。その子にとっては、自分が描いていることは分かっているのです。その子の年齢なりに。これって、ある意味では大事にしなければならないことかなと思いました。

(堂垣教育次長)

ありがとうございました。他にいかがでしょうか。昨年からはじめています非認知能力向上対策事業を視察に行っていたので、その感想等、佐伯委員、いかがでしょうか。

(佐伯委員)

非認知能力のやり抜く力と自制心、協働性とか。よく思うのが、最近の子どもたちは、「〇〇して」とか、「〇〇したらどう?」と言っても、すぐに「えーっ」とか「無理」という言葉が返ってきます。一度否定してから、少し説得されて初めて動き出すという子どもたちがすごく多いのです。第4次とよおか教育プランを進めていくなかで、子どもたちが自分で動く力、いろいろなことを素直に受け止めて、進んでいくような力がこの教育プランでつけていけたらなと思います。

(向井委員)

私も書道を子どもに教えているのですけれども、書道もこれがいいという答えがなく、人それぞれの見方が違って、皆違っていいかなと思っています。子どもたちに教えていて、学校の書道の指導は、決まりどおりにきっちりとかじまり書かせることに重点が置かれているように感じます。私は子どもらしさを大事にしたいと思っています。1本の線でも、思いっきはみ出てもいいから書いたらいいと思っていますが、学校の先生の言っていることと全然違うとよく言われます。その辺でよく私も悩んだりしますが、今の市長のお話を聞いて、いろいろな表現があっただけいいのだと思いましたので、少し自信になりました。「こうでなければならない」ということではなく、それぞれの子どもたちの良さを伸ばしていけるように教えていきたいと思いました。

(中貝市長)

今回、大綱はこれでいいとして、これからまだコロナ対策のことも続いていきますし、それを踏まえた上で、またどう深めるかということのを宿題にしておいたらどうでしょうね。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。たくさんご意見をいただきましたが、今、市長が言われましたように、第4次とよおか教育プランを教育に関する大綱に位置付けるということで、皆さん、ご了承いただいたということによろしいでしょうか。

(一同)

異議なし。

[日程3 その他]

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。この件につきましては、以上で終了したいと思います。協議事項は終わりましたので、その他に移らせていただきます。資料をお配りします。

その他といたしまして、新型コロナウイルス感染症対策によりまして、約2ヵ月子どもたちは休業が続いております。今、資料を2つお配りしましたが、その間におきまして、先週から登校可能日の設定が始まりました。まず初めに、登校可能日における子どもたちの状況について、子ども教育課から説明をさせていただきます。

(飯塚子ども教育課長)

登校可能日を、5月12日から14日の3日間にわたり各小中学校で行いました。欠席状況ですけれども、小学校は欠席児童が60名、そのうち17名がコロナの感染予防ということで欠席をしました。中学校については欠席が56名、うち1名がコロナ感染予防のための欠席ということでした。その他は病欠等の欠席になっております。

登校した子どもたちの状況、課題について、各学校から報告を受けました。そのまとめをさせていただきます。まず、昨年度10日以上欠席していた児童・生徒の様子についての聞き取りになりますけれども、表情や行動から緊張感の強さが感じられる子ども、不安が強く、泣いたり行きしぶりをしたり、保護者と一緒に登校したりする子がいたり、生活習慣が乱れ、眠そうな表情で過ごしている、無気力で覇気のない子がいる、友だちと会って、いつもよりテンションが高いというふうに、非常に気持ちの高ぶりや不安というものがあるといことがよく分かりました。とても一所懸命頑張っている子どももちろんおりましたけれども、課題として挙げさせていただきます。

2番です。これは特別な支援が必要な子どもたちということで、昨年度、今年度の特別支援教育支援員の配置要請のあった児童・生徒についての聞き取りをさせていただきました。まず、顔色や表情から生活習慣の乱れが感じられる子どもがいたり、久しぶりの学校で気持ちが作れずに、教室に入れず保健室で過ごした子ども、落ち着きがなくおしゃべりが止まらなかった、離席が多く、人を待つことが普段よりできなかった、友だちにちょっかいを出したり、約束を守れないことが増えた、1人で座っている姿が多く見られたり、それから、生活ノートに部活動がどうなるのかという不安が毎日のように綴られているというふうに、ここにつきましてもやはり長い間子どもたち同士のつながりというものがないので、話しかけにくいとか、輪の中に入りにくいとか、そういった状況の子どもたちが課題として上がってきておりました。登校の状況のまとめは以上です。

(堂垣教育次長)

皆さんから感想等ございましたらお願いします。

(中貝市長)

コロナ感染症予防のための欠席というのは、結局保護者なのか本人なのかが怖いと言っているということですね。これは、時間が経てばなくなっていくということで、放っておいていいようなことなのか、何か声かけをしなければいけないのか。声かけをする場合でも「来なさいよ」というのはどうかなという気もするのです。こちら自信がないですね。そんなことを言って、その子が感染して誰が責任を取るんだという話になって、なかなかできないので、そうすると、

できるだけ客観的な情報を伝えて判断を促す。客観的な情報というと、学校を長く閉鎖してしまっているから、子どもたちの感染リスクが本当にどのくらいかというデータが足りない。豊岡市は専門家とつながっていないので、本来なら文科省なり兵庫県教育委員会が、ちゃんとした分析結果を出すべきだという気がするのです。それはちょっと国や県に要望書を出しましょう。それでなお難しいということは仕方がないとしても、ただ、今の状況だと、おそらく6月になったら、学校は戻ってくるだろうと。でも、やっぱり怖いという思いは変わらない。だけど、うちの子をそのまま学校に行かせなかったらどうなるのだろうという不安があって、結局保護者や本人を追いつめることになってしまう。

(嶋教育長)

本人よりも、むしろ、保護者の心配のほうが大きいだろうと思います。今回、登校可能日を設定したときに、市民からいろいろな意見が寄せられました。ものすごく暴力的な意見で、「誰が責任を取るんだ」みたいなことももちろんありましたし、中には、そうだなと思うのですが、うちは本当に外に出ることを自粛していると。とにかく家の中で過ごすように家族にも言っている。ところが、ちょっとスーパーに行くと、親子連れで子どもが出かけているじゃないかと。そのことを見るにつけ、その子たちと一緒に学校に行かせるわけにもいかないのと、まっとうな意見なんです。週に1回だけの登校可能日ならそれはそうなのだけれども、全面展開するとそういうわけにはいかないということで、そのこともよく聞きながら、でも、なぜ豊岡市は学校を開けたのかということをお話していくしかないのかなというふうに今思っています。放つたらかすわけではないということで、欠席した子には課題も届けますし、こういうことは不登校アクションプランに入っていますから、欠席した日は電話を入れますし、家庭訪問もしますので、そういう対応はするので、決してそういう意見を粗末にしているわけではないですけども、豊岡市としては、こういう判断をしたのだと言っていくしかない。ただ、市長がおっしゃるように、疫学上というかエビデンスがまったくないので、そのところが弱いですね。

(中貝市長)

今あるデータの中では、子どもが重症化する確率は非常に低いし、子どもが親や周りにうつす確率もかなり低い。コロナ専門家会議は、子どもは地域において、感染を拡大する役割をほとんど担っていない。しかもそれはエビデンスがあるというふうにおっしゃっています。本当はその辺を、もう少しちゃんと数字というか、データをもっと示していただきたい。

それから、これは心理学的にはまっとうな反応なんですね。それはそういうものだと思っ止めて対応していくということになります。

(嶋教育長)

今、週1回でこういう反応が起きているので、例えば一見元気なんだけれども、友だちと会った途端にテンションが高いという子がいるのですけれども、この子たちは、登校がずっと続いているときには、不登校傾向になる大きなリスクがあります。友だちとコミュニケーションが苦手な子どもは、例えばお母さんが「週1回だから頑張って行きなさい」みたいに言われて来ていたかもしれないけれども、ずっと続くようになると、かなりハードルが高くなっていくのではないかと。ということを覚悟しながら、学校は子どもたちを見ている。問題は、いつになるか分かりません

が、全面展開したときかなと思います。

(堂垣教育次長)

いかがでしょうか。ご意見等ございませんか。

(中貝市長)

全国市長会は全国の首長、市長に9月入学の件について、意見の照会をしたところ、80%が反対あるいは慎重で、20%が賛成。だけど、その賛成の多くは、同じことを言っていて、やはり慎重にしなければならない。そもそも今やる議論かと。今は子どもたちの状況の解決として、9月入学って意味がないのではないか。こんなことにエネルギーを今は費やすときではないというのが圧倒的な意見でした。おそらく、6月に学校が再開したら、雲散霧消すると思います。みんなそっちのほうへ一所懸命になって。分かるのは、子どもたちをまったく見ていないから、ああいう議論が知事から出てくる。知事は見えていない、子どもたちを。兵庫県知事は見ているから、慎重にと言っているのだと思うけど、見ていないと思いますね。だいたい知事でも市長でも現場を見ていないですからね。そういうのが平気でやろうと言えるわけですね。困りますね。

(堂垣教育次長)

ありがとうございます。もう1枚の資料のほうに移らせていただきます。小学校・中学校の授業時数について、になります。これもこども教育課からお願いします

(飯塚こども教育課長)

6月から仮に学校が再開されるとして、今後検討していかなければならないことの1つに授業時数の確保ということがあります。現状は、この左側の改訂後と書いている小学校4年生以上で1,015時間、中学校は1,015時間の授業時数というのが学習指導要領で定められている基準になる授業時数になってまいります。

そこで、6月から再開された場合、どういった状況で考えていかなければならないかということをつくつか例を挙げているのですが、例えば平日、今は水曜日だけ5時間にしていますが、平日月曜日から金曜日まで、すべて6時間、そして、夏季休業を1週間にした場合は、1,140時間取れます。現状の水曜日を5時間で夏季休業を1週間にした場合は、1,100時間となります。同じく水曜5校時で、夏季休業を1週間で、始業式と終業式の日を午前中にした場合は1,091時間、それから、6月の第1週、仮に再開になったとしても、もし午前中にした場合は1,082時間ということで、今こういう状況の中で年間授業時数というのをどうにかたちで確保できるかというのを検討しているところになります。

ただ、必然的に夏季休業については、1週間もしくは2週間にしないと、完全な確保というのはできないだろうというふうな考えを持っております。その後、下に学校行事のことを書かせていただいております。この授業時数を確保した中で、それぞれどの学校行事をしていくのか。要は、子どもたちにとって、どの行事が優先されるべきであるかというところを絞っていきながら、そして、授業の時数を確保していきたいと思います。例えば卒業式、これは1日というふうにカウントすると、当日6時間ここからマイナスになります。昨年、準備をほとんどせずにやりましたので、こういったことを生かしながらいくと、これだけの時間数でいけるだろうか、体育祭

や運動会、これも形態によるのですが、1日やる場合は当日の時数は6時間、それと、あとは体育祭や運動会に向けて、どれくらいの準備をしたらいいのだろうかとか、こういったところから、正規の授業という部分をどれくらい確保できるのかというのをこれから考えていきたいと思っております。ただ、どちらにしても、6月再開ということがまず決定しなければ、この議論にならないというふうに思っております。

(中貝市長)

夏季休業1週間というのは、1週間しか夏休みがないということなの。

(飯塚こども教育課長)

はい、そうです。

(中貝市長)

かわいそうだな。暑いなか学校に来させられて、夢も希望もないな。

(佐伯委員)

すでに、学校にクーラーがつけられていて、良かったと思います。

(嶋教育長)

今年のカレンダーで言うと、お盆前後を取ると、連続9日休みになります。例えば、8月8日から休んで、9日の週全部と16日までで9日間になります。計算すると、先ほど言ったような学校行事、今までやっていることを最低限やったとすると小学校で106時間ですから、それでいくと1,015時間にプラスして、1,120時間ぐらいはいるということだから、あと、いちばん上は平日6時間、夏休みを1週間にした場合で、20時間余剰があるということですね。その20時間の中に体育祭・運動会の事前指導であるとか、文化祭の事前指導であるとかということが入ってくる。それから、インフルエンザ・大雪・台風等で休みを取らなければならないというふうに考え、いつも言っているように、かといってバランスの取れたものにしなければならないので、今、時間数を入れていないいろいろな文化活動というのをどう組み込んでいくのかというところが、これから考えていかなければならないところです。

(向井委員)

昔のように土曜日の午前中というお考えはないですか。

(嶋教育長)

今この生活に慣れているので、子どもの生活リズムからいくと、それができるのかなという思いもあるし、それから、社会教育活動を非常に盛んにやってもらっていますので、その問題、それから、教員も勤務が対応できるかどうかということですね。

(向井委員)

そうですね。

(嶋教育長)

他の県では土曜でやれよと言っているけれども、どんなふうにするのかなと思ったりしますね。

(中貝市長)

ということは、子どもたちのアクティビティクーポンが、土日しか使えないですね。

(嶋教育長)

7月23・24・25・26日と4連休があるので、そのあたりでクーポンは使えると思います。

(中貝市長)

文科省は何年間かで回復してもいいと言っていますね。小学6年生と中学3年生は難しいでしょうけれどもね。

(嶋教育長)

向こう2年間ですね。その対策が具体的に見えてきたら、この前もお話ししましたが、この単元とこの単元は、この学年より上位学年にしましょう。上位学年のこのときにしましょうというのが見えてきたら、それができて、その時間は行事に当てはめることができます。あとはあなたたちで考えなさいよといっても、なかなか現場としては難しいです。今、教科書会社が必死になって、それができないか、複合的にこの単元のこの教科をここと一緒にするみたいなことで副読本を作ろうとしていますので、そういう研究者とか、そういう力を頼ってやっていく必要があるのかなと思います。

(中貝市長)

今年の子どものためにも、できるだけ休みがあるようにしてってください。散々家に閉じ込められて、友だちともろくに遊びもできず、コロナは怖いし、おまけに夏休みは短くなっちゃっている。お先真っ暗になっている。今年こそ、まだ夏休みがあればとか、もし2年ぐらいでばらけることができるのなら、できるだけそこをやって、子どもたちの夏休みはできるだけ確保してやってほしいなと個人的に思います。

(堂垣教育次長)

次は21日ぐらいに、また方針が出てきます。そこで6月再開とかがわかれば、また検討が始められるのですけれども。なかなかそれが決まらないと、検討ができないという状況があります。毎年させていただいている狂言教室とかサンタクロース会議なども、今検討しているところです。

(中貝市長)

狂言は特に永楽館に集めちゃうんですね。

(嶋教育長)

そうですね。移動時間の無駄が出てくるので、1時間観劇するサンタクロース会議にしても、

狂言にしても、現場は本当にありがたいことですが、バスを使って、行って帰ってくると半日仕事、つまり3時間ロスが出ますね。そのあたりをどう考えていくかという問題があります。

(中貝市長)

サンタクロース会議は、今何校か集まっているのでしたっけ。

(向井委員)

100人ぐらいでしていると言っていますよね。

(佐伯委員)

80人ぐらいとか。

(中貝市長)

逆に各学校に行ってもらったら。

(嶋教育長)

それができたら一番いいんですけど。

(中貝市長)

演劇関係の予算をかなり積んであるんですが、豊岡の子どもたちと外の子どもたちの連携をうたっていて、おそらく予算を全部消化できないと思います。もしサンタクロース会議が意味があるとすると、各学校に全部行ってもらおうという手もある。1回それも検討してみてください。小学校は29校、今何回やっているのでしたっけ。

(堂垣教育次長)

永楽館と市民プラザで、何回でしたっけ。

(佐伯委員)

4回か5回ぐらいはやっていましたね。

(嶋教育長)

学校ではやっていないの。

(堂垣教育次長)

今は市民プラザと永楽館だけです。

(中貝市長)

バス代が要らなくなっちゃうから、そんなにむちゃくちゃ高くもないと思いますね。というか、少しはバス代要らなくなるので。1回ちょっと検討してみてください。もし、これを実施したいということであれば。

(堂垣教育次長)

せっかくの機会ですので他にでも結構ですので、ご意見等ございましたらよろしくお願ひします。

(中貝市長)

豊高の生徒から、僕の messenger に連絡が来て、大学の推薦入試なんかをやっているのか、そのためにと言って、豊岡の農業政策を勉強してそれをまとめて、市長に会いたい。「よっしゃ、よっしゃ」と言っておきましたが、そんなこと昔はあり得なかったですね。各学校に授業に出ているということと、それから、ウェブの力ですよ。非常に近くなっているというかね。昔はそんなことはないから、市長に会うってどうしたらいいんだと。そもそもそんなこと思いつきもしなかったですね。いい時代になったなという気がしますね。松本の信州大学にいる学生からは、豊岡市も養父市みたいに1人2万円の学生の支援を考えておられるかという質問がありました。

(成田委員)

授業の確保とか、子どもたちに学校教育をきちんと与えていくという方向で考えていただくことは、非常に大事なことだと思います。子どもたちが休んでいる間に私はずっと同じように休んでいるわけですが、ある作家が「子どもたちへ」と話をしていました。この機会に家にいる時間がたくさんあるから、読書をしてみましょう。もう1つは、盛んに今コロナ情報をマスコミ、その他でやっています。それを自分なりに見た、感じたことを日記につけてみましょう。コロナ日記というものを作ってつけてみましょう。もう1つ、力がある子は、世界には感染症というものがある。それには歴史があって、いろいろなものがある。それについて調べてみましょう。普段、学校でできないことをこの際プラスに生かしてやってみましょうということを言っていました。子ども向けに言っていたけれども、私も子どもになって、この方針に従ってちょっと動いてみるかなという思いになって、読書をやってみよう。コロナ日記をつけてみよう。これはファイルを1つ作りました。それから、感染症について、そんなに大した調べはできませんけれども、子どもがやる程度にちょっとやってみるかということで、実行しました。たぶん、子どもは勉強できなくて大変だ、友だちとのコミュニケーションができなくて大変だというあたりに視点がいくのですが、何か逆風をプラスに生かせるようなことを、自分の人生の中でこんなふうに一斉に2ヵ月も学校に来るなということは、かわいそうな経験ではなくて、ひょっとしたら長い人生で見ても、プラスに生かせる期間にならないだろうか。そこで何かを学ぶということは、子どもにないのだろうか。そんなことは学校に来てから検証するようなことは、なかなか難しいかもしれませんが、私はきっとそんなこともあるのではないかという気持ちになっています。

例えば思い出すが、水害で長く休みになったことがありました。勉強も遅れるし、教育もできないわけですが、こういう休んで経験したことをすごくプラスにしていった例をたくさん見てきました。そういう子はたぶん将来の自分のエネルギーにしまったようにも思います。何かそんな力もどこかで生まれていないかなというような気もしますので、それを皆出し合おうとしているのではなく、何か前向きなものとして捉えられたらいいなという気がしています。

(中貝市長)

近大高校の子が水害の調査をやって、それがもとで国立の災害の研究所の研究者になっているというのがあって、面白いですね。転んでもただでは起きないようなことっていうのはありますね。ぜひ各学校でも、そういう意識でやっていただいていると思いますけれども、さらにね。

【日程4 閉会】

(堂垣教育次長)

ありがとうございました。予定の時間になりましたので、他にご意見等がございませんでしたら、これもちまして、2020年度第1回豊岡市総合教育会議を終了させていただきます。

閉会 午前10時30分
